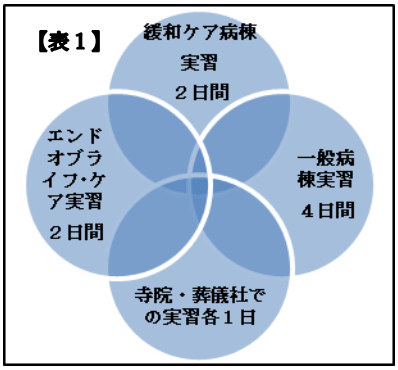
テーマ:終末期看護を学ぶ　ー死生観の醸成に向けての取り組みー

1） カテゴリー　：　③教育方法
2） 学校概要　：　丹波市立看護専門学校　　兵庫県丹波市氷上町石生 2069 番地 2
3 年課程、1 学年 40 名定員、3 年修業

【取り組み内容】 本校は市のスローガンである『丹（まごころ）の里』を基盤として自己の感性を磨き、思いやりの“こころ”を持つ看護師の育成を教育理念としている。

現代社会においては、人々の価値観が多様化し、生活形態も変化している。看護師は人の死と向き合い、死に直面した患者及び家族のこころとからだを癒す看護を提供することが求められる職業である。死生観の醸成は身近な人の「死」に大きく関与されるという研究結果があるが、青年期にある若者においてその体験は乏しく、死生観を観念的にしていることは否めない。

そこで本校では、死生観の醸成を基にターミナル期に必要な看護を行える看護師を育成するためにターミナルケア実習（2単位・90時間）を展開している。（表 1）



寺院・葬儀社での実習

死を迎える人や身近な人の死に遭遇する家族に看護師として向き合うためには「生」や「死」に対する幅広い見識を持つことが必要とされる。そこで、医療の現場だけに留まらず、“寺院”、“葬儀社”での実習を取り入れた。

1．寺院の住職の説法を聴く

市内の寺院に出向き、寺院の境内で住職から仏教の視点から死生観をテーマにした説法を受ける。その中で、与えられた命の大切さを見つめ直し、”死”に対する向き合い方を考えていく。また、住職の話から“傾聴すること”“他者のありのままを受け入れること”など、人が生きる上で大切なことを学ぶと共に家族に対するグリーフケアの実際を学ぶ。



2．葬儀社で納棺士の話を聴く

葬儀社に出向き、納棺士から“死”を迎えた人との向き合い方、その家族との向き合い方を学ぶ機会を持つ。最期の時をどのように大切にするか、その人の生きてきた時間や過程を尊重し、故人や家族ができるだけ心安らかに最期の時が過ごせるように向き合っておられる話を聴くことで、死を迎えた人とその家族に対して看護師としてどうあるべきか考える機会とする。また、希望者には納棺体験も行い“死”を具体的に想像することで、人生をより深く見つめ直す機会としている。



エンドオブライフ・ケア実習

近年は療養の場で最期の時を迎えられる方も多く、最期の時間をより良いものにしていくための看護師の関わりから、施設で療養されている方々へのエンドオブライフ・ケアを学び、看護師の役割を理解することができることを目的としている。

緩和ケア病棟実習

緩和ケア病棟の看護師と2 日間行動を共にし、行われている援助の実際を学び、感じることでターミナル期における看護師の役割を理解する。死を迎える患者に寄り添った援助とはどのようなものであるか考える機会とする。

一般病棟での実習

死を免れない患者若しくは苦痛の強い患者を受け持ち、看護過程を展開する。患者の苦痛を理解し、安楽に向けた援助を考え実践する。その中で、患者の思いや感情を捉え、その人の意思を尊重し、その人らしさを踏まえた援助を行うことの大切さを学ぶ。

これらの実習を通して、学生は自己を見つめ直す機会を持ち人生観や死生観を構築する。実習終了後に 4 つの実習を学内で共有するが、学生はターミナル期の看護として、身体的な苦痛のみならず個々の患者が抱える生きる意味や死への恐怖といったスピリチュアルな苦悩に寄り添い、共感することの大切さを学んでいる。また、看護師にとって、その人らしく生き抜く援助を行うことは、その人らしい最期を迎えることにつながることを感じると共に、最愛の人を見送る家族の苦痛をくみ取り、支えることも看護師の大きな役割であることを感じ取っている。